

看護大学生の実習経験が表情認知及び コミュニケーション・スキルに与える影響について

○森本 実佳(神戸海星病院), 高坂 美有(姫路聖マリア病院), 中澤 英之(市立伊丹病院),
仲井 千夏(県立明石がんセンター), 藤原 光志(広島都市学園大学)

I. 研究目的

コミュニケーションには言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションの2つがある。この後者のうち重要な役割を果たすと考えられているのが表情である。人と関わる上で表情を読み取る力は重要であると考え。看護は患者から得られた情報をもとにアセスメントするため、表情を一つの手立てとし、普段の生活より積極的に表情を読み取ることに注力していると考え。そのため、看護学実習における経験は表情認知及び、コミュニケーション・スキルに強く影響を与えることが考えられる。本研究では看護大学生の実習経験が表情認知及びコミュニケーション・スキルに与える影響について検証した。

II. 研究方法

1. A 大学看護学部の2年生14名と4年生16名を対象に、成人版表情認知検査とコミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs(以下 ENDCOREs)を測定した。得られた結果について、Mann-Whitney U test、Spearman の順位相関係数を用いて統計処理を行なった。
2. 研究協力者に対し、本研究の目的と方法を記載した研究協力依頼書に基づき、文書と口頭で説明した。同意書への署名を得たうえで研究の同意が得られたとみなした。本研究は関西福祉大学倫理審査委員会の承認(29-0713号)を受けて実施した。

III. 結果及び考察

看護学生は4年生16名、2年生14名の計30名を分析の対象とし、Mann-Whitney U testを行った結果($P < 0.05$ で優位)、表情認知の学年における差および男女差ともに2群間に差はなかった。ENDCOREsにおいては、表現力の「身体表現($P=0.02$)、表情表現($P=0.026$)、情緒伝達($P=0.095$)」、解読力の「身体理解($P=0.012$)、表情理解($P=0.048$)」、他者受容の「譲歩($P=0.037$)」で有意差がみられ、2年生より4年生の方が高い結果が得られた。表情認知能力と ENDCOREs に関して、Spearman の順位相関係数にて正の相関が認められたのは「自己統制($r=0.512$, $P=0.004$)、関係調整($r=0.372$, $P=0.043$)」であった。

表情認知能力では両群の間に差が認められなかった。その要因として、研究協力者の人数が少なかったこと、研究協力者を無作為に選定しなかったことが、結果に影響した可能性がある。

ENDCOREs について差がみられたのは、表現力の「身体表現」「表情表現」「情緒伝達」と解読力の「身体理解」「表情理解」と他者受容の「譲歩」であった。そして、表情認知能力と ENDCOREs の関係において「自己統制」「関係調整」に相関がみられた。その理由として、両者は他者の主観的体験の理解、他者への気づきや思いやりという他者志向的感情である共感性の定義と強く関連しており、関係調整と表情認知能力との間に正の相関が見られたと考えられる。これらの結果は、「関係調整」を向上させることによって、表情認知能力もそれに伴い向上していくことを示唆していると考え。